君の世界の輝きは

白波　透歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の世界の輝きは

【Ｎコード】
Ｎ４２３６Ｙ

【作者名】
白波　透歌

【あらすじ】
異世界の神様を家族に持つ少年、白片凍津弥。
放課後の日帰り異世界旅行が日課となっている。
超えられるはずのない壁を超えていく少年は何処に向かうのか。
異世界と生まれた世界で綴られ絡まる物語。

それは飽くまで日常の（前書き）

小説というものを初めて書いてみました。稚拙な文章や文法は多々あると思います。お目汚しになると思いますが、よろしければご覧ください。

※思いつきで書いてある部分が多くありますので訂正がよく入ります。ご容赦ください。

それは飽くまで日常の

瑠璃色の木漏れ日が照らす景色を入口に。冷たい家族と出会った。
停滞を打破するフィナーレを響かせ続ける劇場を通り。留まることのできない幻葉と出会った。
地表に根を生やし、天井に枝を生やした褐色の地下街を抜け。夢が現実の眠り姫と出会った。
天を突き、空を埋め尽くす紅色の花傘の下。輝きの園に咲く棘のない薔薇と出会った。
水晶のように透明で荘厳な木々の根と、世界の内側に建てられた教会の中で。今にも砕けそうな白い苗木に出会った。

独りになって。
一人ではなくなって。
独りじゃなくなった。
そんな俺の話。

寝てはいけない、寝てはいけない！
教室の自分の席で俺は強く念じていた。しかしそう思いながらも、逆らえない眠気が俺の身体を襲っていた。
睡眠欲にならいくらでも対抗できる。自慢じゃないが四日間の徹夜なんて朝飯前だ。　俺の中にいる目覚まし時計の力を借りればいくらでも起きてられる。
しかし、残念ながら。今は寝ているのだ。
誰がって？　それは勿論目覚まし時計がだよ。いや、目覚まし時計って言うのはもちろん比喩なんだけど。それに目覚まし時計というとあいつは怒るんだ。
ちゃんとテーゼと名前で呼ばなくては。
（テーゼ！　おーい！　起きてくれ！）

頭の中で、俺に根を張る〈樹〉に呼びかける。
しかし返答はない。
だがそれも当然か。昨日あんなにもはしゃいでしまったのだから。ティノアと思いっきり戦ったのなんていつ以来だろう？　テーゼの力も存分に借りてしまった。今くらいゆっくりと眠っていても文句は言えない。
いつもは授業みたいな練習みたいな生温いことばっかりだったのに。何で昨日はあんなに……。
いやそんなこと今はどうでもいいんだ！
俺は今、寝てはいけないんだ！
寝てしまえば放課後の日帰り異世界旅行に行けなくなってしまう！
補習、調教、体罰、訓練。そんなことに時間を使っている暇はないんだ！
けれど。これには対抗できそうにない。睡眠薬なんて初めて飲まされた、というか食わされたがこれは駄目だ。どうやっても耐えられない。こうやって無理矢理唇を噛んで意識を保つのが精一杯だ。
そしてそれも限界だ。目蓋が、俺の視界を閉ざす。ゆっくりと。真っ暗な世界に俺を誘う。
「おやすみ、凍津弥。次に会うのはお姉ちゃんの前だから楽しみにしといてね～」
眠る直前に。楽しそうな声で。死刑宣告を告げられた。

夢を見ている。その自覚がある。
俺が今まで、ずっと一緒にいる奴と出会った時の夢だ。
けれどこれは、俺の夢じゃ、ない。
水晶のように透明で。白亜のように脆く。枝を伸ばせば伸ばすほど、白墨のように短くなっていく樹の。
〈根〉が見続けていた夢だ。

世界とはどこまで行き着こうとも一つの器の中にある。
そんな私にとっての一つの事実は、一人の少年によって覆された。
私にとっての二度目の出会い。
少年と寄り添った時のお話し。
イツヤと私の出会いの夢。

どれだけの時間が経ったのだろうか。
今となっては〈誰か〉の声を聞くこともできない。
今となっては、彼女たちに後を任せるしかない。
姉妹であり娘でもある彼女たち。
あの娘たちもいずれこんな思いを感じてしまうのだろうか。
〈誰か〉と共に有れた時の無上の幸福感。
〈彼〉と共に歩んだいくつもの世界。
知を得る事が自分を広げることだと信じ、広がることが新たな知へと繋がる『枝』となる。
無数に、無限に伸びた『枝』はいずれ世界さえも包み込めるのだと。
信じて、いたのだ。
彼が居なくなるまでは。
「なぁテーゼ。俺はさ……ここが、好きだったんだ。お前がいて、皆がいるこの世界が。暗がりの奥でもいつも明るい光を保っていたお前が……眩しかった。……だから……」
――だから、俺と一緒に死んでくれ。
願いの声は誰にも届かず。ただの独り言のはずだった。
ただ〈わたし〉には届いた。
星を縦に割っても到らない筈の声は。渦中の世界の心央に響いた。
そんな〈彼〉の願いに。

（喜んで）
私はそう答えた。
〈彼〉の最後の声は〈わたし〉が輝いても消えない星のようで。
星空が溶けても傍に居てくれた時が愛おしい。

二人で歩んだ時に心を還す。
私の根。
私の心。
〈彼〉はもう居ないのだ。

娘であり、また姉妹でもある少女たち。
彼女たちは今、どうしているのだろうか？

熱の無い冷たい身体。自由であっても孤独な蒼の水源。
機微であっても怒りと悪意を伴えない心情。紅い空を生み出すもう一つの光源。
空っぽの記憶を生み続ける意思。覚醒は終わりだと知る黄の大地。
一箇所に留まることのできない想い。翠光が織り成す進歩のない不朽の循環楽想。
今も歩み続ける世界を支えるための犠牲。
〈彼〉と〈彼女達〉がその身とその身に宿る命すらも犠牲にして作り上げた世界。
〈わたし〉に何が出来たのか。
〈わたし〉はまた約束を果たせなかった。
もうすぐ終わる。
〈わたし〉が終わり世界も終わる。
このまま〈彼〉と〈彼女達〉の元へ行けたらどんなに良いか。
もう一度会えれば〈わたし〉の願いも……。
叶わない願いを、願う。

〈誰か〉に。
〈わたし〉の声を聞いてくれる、〈誰か〉。
誰か、居てください。
願いの祈りに応えはない。
しかし、まるで願いが叶ったかのように〈誰か〉が天から落ちてきた。
「危ないな。何すんだ……ってあれ？　サイバル？　どこ行ったんだ？」
声が一つ。まだ幼さを残した声。〈彼〉が好きだった人の子供。
知らない声、だった。
「……君は誰？」
〈わたし〉に向けられた知らない顔。
「泣いてるの？」
知らない瞳。
「サイバルが助けて欲しいって言ってたのは君のこと？」
知らない輝き。
歩み寄ってくる人の子供。
少年か少女か分からない中性的な笑顔。
眩しい〈彼女達〉の顔を思い出させる。

〈わたし〉が根ざす白い広場。
今は私と目の前の子供しか居ない空間。
影すらも許さない白を零した私の世界。
〈わたし〉はその切り取られた世界を、自身の目線ではなく、見下ろすように俯瞰していた。
〈わたし〉以外の存在を許せないこの場所で、異物を消し去ろうとする〈わたし〉の『廃白（リズ）』
白い光が、光輪となって〈彼〉に似た子供に迫る。

音も無く子供の頭蓋を消し去り、湧き出る血潮も直ぐに白く染まる。
首から下の人の肉は白の地に伏し融けていく。
地に伏した肉は溶解し白に覆われ。
骨は塵となって白と混ざる。

筈だった。

水面を跳ねる石の音が鳴る。直後、子供の身体を飲み込むはずだった光輪が剃れた。
立ち尽くした子供の身体を撫でるように。
〈わたし〉の視線で見直せば子供の体は蒼色の波に覆われていた。
あれはクラリシアの『波』だ。
子供の体には大きすぎる水色の膜。
青から蒼へと広がる色の流れが迫る敵意を受け流す。

驚愕の前に安堵感が枝に広がる。
〈彼〉との約束に背かずにすんだことで。

〈彼女〉に似合っていたサファイアの布地。それと見間違うような色合い。
〈わたし〉と根を同じくする根源色（オリジネイト）。
「ティノア？　大丈夫だよ？」
子供は蒼い少女に向けた言葉を放った。
上を見て。白を上書く蒼を見て。
世界を揺らす鈴の音と共に。真っ白な心を震わせる、恵みの雨が降る。

この子供は……だれ？
「はじめまして。白片凍津弥（しらかたいつや）です。君の名前を教えてください――」

天を仰ぐ時間の後。
逡巡の後に伸ばされた小さな手。
〈わたし〉はその願いのような囁きに応えてしまった。
その手をとってしまったのだ。

伸ばされた指先が「私」に触れる。
少年の身体が消えていく。
チリチリと欠片になって消えていく。
爪先。
指の第一関節。第二関節。
手。
手首。
続けて塵となる少年の右手。
神経をヤスリで削り取られているような痛みが走っている筈なのに、少年は苦悶の声一つ挙げない。
生き地獄の最中だろうに。
少年は私に笑いかけた。
「大丈夫だよ」と。
『廃葬空白（イニシャル・ステイト ディーパ）』
私の灯銘が、人としての対抗も、命としての反抗もないままに受け入れられた。
まるでそこが私の根であるかのように。
〈私〉は〈少年〉の右手に枝を伸ばした。
〈少年〉の新しい手を作り上げる。
その時〈私〉は〈彼〉と〈少年〉のことを知った。
〈彼〉は最後に、勿忘草（わすれなぐさ）の色を受け入れた。
〈蒼〉を受け入れていた。
〈私〉を忘れないで居てくれた。

それは飽くまで日常の（後書き）

ちょっとずつ書いてみようと思います。

向けられた瞳の輝きは

「ん……」
夢を見ていたことは覚えている。
けれどそれがどんな夢だったのかは覚えていない。
俺は夢という掴めない幻想よりも、掴まなければいけない未来があるのだ。

目覚めは決して良いものではなかった。
教室の空気は重たい。寝起きの俺の頭も重たい。
そして。目の前には見ていて胃が重たくなるような濃い顔があった。

「おっはよ〜凍津弥(いつや)くぅ〜ん。今日もよく眠れたかな〜？」

目の前には新任っぽい教師？　いや化粧の濃い教師がいた。
大人の女性の年齢というものは見た目ではわからないな。
……名前は……忘れた。誰だっけ？
まぁいいや。先生なんて皆同じように先生と呼べばいいだろう。
男でも女でも。
小さくても大きくても。
先生は、先生なのだから。

「ねぼけてな〜い？　起こしても起こしても起こしても！　起きなかったから心配したの〜よ？」

う〜ん。気持ちの悪い喋り方だ。大人が子供っぽい喋り方をしているというか、野生の狼が人に飼われた子猫のように鳴く気持ちの悪さ。

あまり視線を合わさないように話すとしよう。

呪われそうだ。

「はい先生。先生の声はまるで月をも落とす子守唄のようでした。お陰様で熟睡していました。ありがとうございます」

思ったことと真逆の感想を述べてみる。俺が寝ていたのは薬のせいだ。薬でも飲まなきゃこんな呪術をかけるのにぴったりの声が響く中寝られる訳がない。

「あ～らそ～う？　私の声そんなに綺麗～？　でもね～今日は私が授業していたんじゃないんだぁ～」

そうでしたね。さっきまで忘れていた、というか忘れたふりをしていましたけど思い出しましたよ。

「今日はね～。わが校の行事について、先輩から色々とお話をしていただいていたのよ？　それを堂々と居眠り！　するなんて……」

黒板の前で、喜劇の脇役のように右往左往しながら喋る先生は見ていて面白かった。

しかし。

周りの同級生たちは三文役者の芝居など見向きもしないで、俺の方を向いていた。

正確には俺の後ろの席を見ていたのだが。

認めたくなかった。しかし認めざるおえない感触が後頭部に届く。

コツンと。後ろから何か固い物で頭を叩かれた。
それが鞘で、持ち主が誰なのかを理解したとき、俺は覚悟した。
色々と。

俺の教室での席は窓側の前から４列目。後ろの席に座っているのは俺のよく知る理知的な友人だ。クラスの代表も務めている、静かで冷たい視線が少しキツイときもあるが普通の女の子のはずだ。

こんなに背が高くて、俺を見下ろせる身長じゃ決してないんだ。

コロコロと表情を変化させる人でも決してないんだ！

見た瞬間は今の季節と同じ空気を感じさせてくれた。春の日差しのように周囲を暖かくさせることのできる笑顔だ。そんな暖かい表情を。目が合って一秒も経たないうちに、辺りに寒冷の気塊をとりまくように寒々とした笑顔に変える。

俺の友人は決してこんな風に季節を逆走させることのできる奴じゃない！

「それでは都喜（とき）教諭。この生徒は預かっていきます」

そう言って何故か楽しそうな声の主。ひとつ年上にして俺の保護者を自称してはばからない女――陽元（ようもと）美刃（みは）は、席を立つ。

そして。俺の制服の襟を片手で持って、窓の外に放り投げた。

ちなにみにこの教室は六階だったりする。

外から見た教室が、一枚の絵画のように映る距離まで投げられた。

絵画のモデルである同級生達からの視線は多種多様だ。怯えだったり羨望だったりの曖昧な感情が見て取れる。

そんな中。友人たちからの視線はいつも通り、変わらないものだった。

美刃の後ろに立っている眼鏡の女の子の視線は「またですか」とでも言いたげで冷たい。

前の席の奴は右手の親指を立てて、「死ぬなよ！」と無言の激励をしてくれていた。同情か憐憫かは判別がつかない。

廊下側の席には子供のように片手を振る奴が一人。「さようなら」とも言いたげな、縁起でもない瞳が向けられていた。

そして。

美刃が座っていた席の隣には。片手に美刃から預かったと思われる鞘に収められた真剣を手にして、必死に笑いを押し殺そうとしている一人の女子の姿があった。

美刃の妹、美瀬（みせ）である。姉と自分を楽しませるためなら何でもする危険人物。

笑いながら俺の方を一瞥したそいつの瞳には、喜々とした輝きを感じ取れた。こうなることを見越して俺に薬を盛ったのだろう。

ああ、そうだったな。お前の仕業だったな。確かにお前が俺に昼飯を恵んでくれるなんておかしいとは思っていたんだ。
思ってはいたんだよ……。
何かが仕込んであるとは思っていた。
けど空腹には耐えられなかったんだ。

「覚えてろよ！」

一瞬の浮遊感。それも束の間。
捨て台詞で美瀬に復讐を誓ったときには。
もう五階の教室が見えていた。

その緑は輝かない

落ちていく。
真っ逆さまに。
頭から。

落ちながら見上げる空は青く、散在して佇む雲は白い。
そんな空に黒点が生まれた。
逆光で瞬時には判別できなかったが予想はついた。
地面に落ちると分かっている紙飛行機を空に飛ばすように、俺を窓から投げ飛ばした殺人（予定）犯が。
後追い心中するかのように。
躊躇なく飛び降りていたのだ。

降ってくる美刃を見ながら考える。
俺はこれから未来を掴まなければならない。
地面に辿り着く、約二秒先でも。
生きる未来を、掴まなればならないのだ――。

私立幹能見学園高等部。
俺、白片凍津弥はここに通う一年生だ。
……俺は今日十分な睡眠を取っていたはずなのだ。けれど昼食を食べてからの記憶がない。俺が昼食後の授業からの記憶がない理由。それは薬を盛られていたからなのだが、それを知る者は俺と薬を盛った本人だけだろう。それに俺と一緒に落ちてくる女は過程よりも結果を重視する方が多い。つまり何が理由であれ俺が授業中に寝てしまったことは事実であり、それ自体を看過されることはないということだ。
――自分の誤った行動の結果が今の状況である、と思い出すのにか

かった時間は約一秒だ。

地面にぶつかるまではもう一秒強ほど余裕がある。

真上から注がれるじっとりとした視線が怖い。何で落ちながらそんな笑顔になれるんだ。怖いので目を瞑ろう。そうだ。落ちている間は暇なのだ。せっかくだから陽元美刃（ようもとみは）について思い返して見ようと思う。

俺は瞑った瞼の内側で。一緒に堕ちている女のことを思い浮かべた。

陽元美刃。多くの学生を集めるこの学園において、多くの視線を集める容姿であることは否定しない。二年生にして既に大人びた容姿。抜身の刀のように触れがたい存在感はどこにいても目立つし、着飾った丁寧な姿勢を土台にして、大勢の前でも物怖じしない性格でもある。剣道の実力は齢十五にして学生の間では既に並ぶものなき実力者でもあった。才色兼備、文武両道と言えば分かりやすいが、それだけで彼女のことを説明できるとは思えない。生徒の多くが慕う人格者を演じられる人格を持ち、剣道の指導者としても部員から多くの支持を集めている。単純に「変」と言うのが彼女を表現するのには適切な言葉だ。

――ここまでの俺の追想にかかった時間は約一秒。

明らかに現実とは流れる時間の速さが異なっている。

もしかしたらこれが走馬灯というやつなのかもしれない。

いや、それにしては短すぎるか。大分大雑把だし。短く区切られてるし。

けれど。もしこれが本当に走馬灯なら俺は生き方を反省しなければならない。

最近しょっちゅう出会うんだ、走馬灯。

一日に一回以上は見てる気がする。

段々と地面に近づいていく。

もうそろそろ振り返る余裕も無くなる。

俺の好きな色の一つである緑色の景色は、何時だって俺の心を鎮めてくれる。

出来れば俺と一緒に落ちてくる女の心も鎮めて欲しいんだけど……っと！

芝の地面と三十センチ程で衝突、というところで俺は右手を握って開く動作を二回繰り返す。

落下っていうのは慣れればどうということはない。バンジージャンプだって何千回もやれば恐怖なんてなくなるだろう。紐がない状態で繰り返したとしてもそれは同じだ。

慣れるまで身体が持てば、の話だけど。

慣れていても空中で綺麗に回って華麗に着地、とはいかなかった。

俺は右手で芝の地面を叩きつけることで衝撃を殺し、転がるように地面を回った。

危ない危ない。変な姿勢で足から落ちてたら骨折するところだった。

「相変わらず器用なものだ……な！」

その俺の真横に。まるで体操競技の決め技のように華麗に四回転して着地する美刃。まるで何かをやりきったかのような満足気な笑

顔だった。
器用なのはどっちだ。
相変わらずの化け物だ。さすが人外の血が流れていると自称しただけのことはある。母親は悪魔、らしい。出会ったことはないし、もう死んだらしいのだけれど。
というかそんなことはどうでもいい。スカートで宙返りとか止めろ。せめてスパッツか何か履けよ。

「それにしても緑が似合わない女だな。お前は」

緑色の下着が一瞬見えた。
似合わないにも程があるのでついつい凝視してしまった。……決して綺麗な足を見ずにいられなかったわけじゃない。
その短いスカートを左手で軽く持ち上げ、男を魅了するためにあるような唇に細く綺麗な右手の指先を当てて。俺の方を見ながら妖艶に微笑む美刃はまさに魔性の女だった。

「ふむ。やはりな。私もそうではないかと思っていた。やはり人の好みに合わせるよりも、私の好きなものを好きになってもらうほうが良いな」

こっち見んな。綺麗すぎて怖いんだよ、お前は。

「そうだな。うん。（よくわからんが）それが良い。――じゃあ、そういうことで」

そのまま帰路に着こうとした。
今なら誤魔化せる。そう思っていたわけではない。可能性は限り

なく零だった。だが千分の一％程の確率はあったと思うのだ。あったと信じたかった。

ほんの僅かな可能性でも賭けたくなってしまう。この場から逃げ出せるという可能性があるのなら。

けれど。やはり分の悪すぎる賭けだったようで。

逃げ出そうとした俺に美刃は音も無く近付いてきた。そして片手で襟を掴まれ思いっきり倒された。制服が伸びる、というかちぎれそうな勢いだった。

「待て。私が好きな色は黒色だ。そして話はこれからだ。私の話の最中、襲いたくなるような顔で眠っていたのだ。これから楽しい個人授業、もとい調教、もといお仕置きの時間だろう？」

「ひっ」っていう一言は、怯えているのを表すのにぴったりの言葉だと思うんだ。「く」を付け加えてしゃっくりと間違えなければ。

がっしりと制服の襟を掴まれて。

芝目の向きを変えてしまうようにずるずると引き摺られて。

俺は拷問所と言う名の剣道場（逆か？）に連れて行かれた。

月下氷人

――あれ？　なんでまた夢を見てるんだっけ？
これは……俺の夢、だよな？
死体のように冷たく、造られたように精緻な、死んだまま生きている少女。
世界と世界の、仲人と出会った時の夢だ。

白い光に包まれて落ちていく。揺り篭のように柔らかなものに包まれて光の奔流に流される。
――ああ、ちょっと思い出した。
俺は美刃の躾を命辛々切り抜け、逃げるように学校から帰った。
夕闇の中。家にたどり着くと同時に、蒼い家族に引っ張られて……。リベラリーゼに連行されたんだった。
リベラリーゼ、一言で言うのなら異なる世界である。灯銘（ディーパ）と言う名の輝きを与えられた人々が、神様という環境を支配する樹に守られて生きる世界。

そこで……えっと喧嘩して……何があったんだっけ。
いや、えっと、そうだ。試合をしてたんだった。
賭け試合を。
その最中に気絶してしまったのか？
思い出せない。もう負けてしまったのか？

（違いますよ）

内側から声が響く。
そうか違うのか。
じゃあ、もう少し懐かしい夢を見てみるとしよう。

あまり見心地の良いものではないのだけれど。

白い光が青色に変わった。気が付けば海と空を混ぜて辺りにばら撒いたような青い空間に行き着いていた。青々一色の部屋は、どこまでも続く空だと錯覚してしまいそうなほど、広く感じる。

天井が見えない室内。

「あんた、何してんの？」

鬱陶しそうな声に引かれて向いた先。

広がるのは蒼穹とも深海ともとれる色を持った少女。

天井が遠い、広い部屋で出会った。

宙に浮かぶ少女。

――（イツヤ）

「ここがどこだかわかってんの？　私の中よ？　断りもなしに入るなんていい度胸……っていうかわたしが許してないのにどこから入ったのよ？」

人形のような顔はとても冷たく、声にも感情がこもっていないように感じていた。

「まぁいいわ。どうやって入ったのか体に聞いたあと、周りに住む魚の餌にしてあげるわ」

目の前にかざされた手に蒼い光が集まる。そこから放たれたのは馴染み深い光。

――馴染み深い？

放たれたのは蒼く細い水の槍。その槍が自分の右肩を貫き、自分の口から出せるとは思えない悲鳴が響く。流れる血を抑えるように肩を抑える。自分を貫いたはずの槍は、ただの水の塊になって床にこぼれ落ちる。

そんな場合でもなかっただろうに。

自分が座る床を見ると一面に薄い水の膜が張られていることに気づく。

冷たくない、人肌に暖か（ぬる）い水温が水に浸かっているという現実を感じさせなかった。

その青いく澄んだ水面を、俺の血が濁す。

――けれどそれも一瞬で、すぐに綺麗な水に戻っていく。

「改めて質問させてもらうわね。あんたこの部屋にどうやって入ったの？」

痛い。痛い。痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

――俺はこの時、痛みでこいつの声をしっかりと聞いていたのかどうかも怪しい。でも後になって、しっかりと聞いていたことを思い出すんだ。

「……ふぅん。喋らないんだ？　なんだか気分も悪いし、もういいわ」

少女の瞳には何も写ってはいない。俺を見ていてもそれは人を見

る目じゃない。ただのゴミを見る目だ。

目の前に掲げられた掌から、刃の切っ先が生まれる。
飽くまでも自然に。当然のように生えてくる。
それを、ぼんやりと見つめる。

肩に感じた、燃えるように熱い痛みと、下半身を包む水の暖かさ。
それら全てを冷たいモノに変えようとする、凍えるように無機質な瞳と蒼く揺れる刃。

「しんじゃえ」

少女の容貌に似合った可愛らしいくも冷たい声。
それが両親と同じ場所へと自分を導いてくれるのを感じて。

――俺は深く目を瞑った。

その家族の輝きは

――（イツヤ！）

「っ！」

自分の内側から響いた声に呼ばれ夢から覚める。
懐かしいが嫌な夢だったなと思う暇もなく。
夢の続きのような光景が広がる。

迫るモノは間違いなく夢の続きだった。
水に蒼色を這わせる事で思うままに弄って作った細長い刃が、目の前を通り過ぎようとしていた。
薙ぐように振るわれたその刃を、水が張られた地面を蹴って右側に躱す。
人の身体を裂ける力を持った蒼い刃は最初から持ち主の手になく。水満ちた床に落ちて、刺さらず溶けていく。
海に砂糖の塊を落としたように抵抗なく。

「動かないでよ！　危ないでしょ！」

響いた声も夢で聞いた物と同じ声。
透明感を持って響きわたる声は、彼女が持つ存在感と同じような色。
心配そうに俺を見つめる表情は死んだ両親を思い出させてくれる。

ティノア・クラリシア。

蒼樹（クラリシア）の管理者にして、今俺が居る地球とは異なる世界と同じ時を生きてきた少女。サファイアで織り上げたようなワンピースが彼女を蒼い光そのものに見せる。
目の内とその体に、死人のような冷たさを宿している。
冷たくても暖かい俺の家族。

「危ないじゃねえよ！　動いて躱さなきゃ、着られてただろうが！」
気を失って無抵抗な自分に向けられた凶器は俺の身体にこそ当たらなかったものの。俺の恐怖心を思いっきり掘り起こした。
「刺さらないようにしたもん！　額の表面に掠って、血が沢山吹き出るぐらいにしたもん！」
そんな俺の怒りに対してティノアは子供が駄々をこねるような口ぶりで応じた。というか「もん」って。見た目に反せず子供っぽい語尾が似合う奴だ。

「いや、狙うならちゃんと狙えよ。死ぬのは嫌だけど。何でわざわざ額を狙うんだ？」
「え？　だって額って怪我の割に血がたくさん出るんでしょ？」

ティノアの惚けた顔はとても愛くるしい。
……訂正。取消。俺はそんなことを思っちゃいない。放言ですらない失言だ。

改めまして。

怪我をするのは許容できる。
訓練という名目でしかないこの争いも、賭けているものがある以上俺は真面目にやっている。
真面目にやっているのは俺の方だけなのだけど。
ティノアが本気になれば今の俺なんて秒殺だろう。

それなのに。俺は手加減されていることに怒りを感じていた。そしてわざわざ血を多く出させようとするティノアの行動に嫌な記憶が蘇った。

「お前……また……」

ティノアの家族になった幼い頃、怪我をして膝を擦りむいて血を流した。その時に俺の血を舐めて以来、何故かティノアは俺の血を飲みたがる。

別にこいつが血を飲んでも元の姿を取り戻したり、大きくなったりするわけでもない。別段吸血鬼と呼ばれる類の生き物でもないし。ただの樹に宿る幽霊のようなものだ。

「べ、別にイツヤの血が飲みたくなったわけじゃないもん！　ただ少し喉が乾いただけよ！」

喉が乾いたなら足元に水が沢山あるだろうが。

俺たちが今戦っている広大な室内には透明な水が満ちている。赤い色素を混ぜれば赤色に。緑の色素を混ぜれば緑色に。なにものにも染まりそうな優柔不断な水の色。そんな液体が室内に満ちていた。

「お前、俺の血なんて飲んでたらいつか腹壊すぞ」

「大丈夫よ。イツヤの血ならきっと飲み干せるわ」

俺の親切心からの進言は明後日の方向に返された。

……飲み干すって、俺を干物にする気か。俺の血はセルフサービスのドリンクバーじゃねえんだぞ。

「前から聞きたかったんだが、お前は俺のことを何だと思ってるんだ？」

いずれ聞かなければならないことだと思っていた。俺はティノア

の事を大事な家族だと思っている。彼女が俺の傍に居てくれたおかげで独りだった俺はどれだけ救われたことか分からない。
けれどティノアの答えは俺が予想していたのとは明後日どころか一昨日の方向だった。
「餌……じゃない奴隷？」
左手の人差し指でこめかみを突いて悩む素振りを見せながらも即答するティノア。
「おい。ちょっと待て」
俺の当然の訴えも聞く耳持たない様子でティノアは言葉を続ける。
「じゃなくて……家畜？」
訂正は早かった。より悪くなったけれど。
……こいつの中で奴隷と家畜どちらの方が上等なのだろうか？
……いやいや、そんなことはどうでもいい。
空いた口が塞がらないという気持ちを初めて知った。さっきのお前へのイメージは訂正しよう。お前なんかこれから「幼児体型の木」の一言で説明してやる。
「うぅ～ん。でも何か違うような気がするわ。もっと、何かぴったりの……」
首を傾けすぎて、身体が時計の針のように回転を始めたティノア。頭が真下になった時でも、長いスカートは彼女と同じように重力に縛られていない。……残念なんて思ってない。
一回、二回と回転を繰り返し、時計の短針で例えるなら約一日と四分の一分の時を刻んだティノアは何かを閃いたように俺を指さして言った。

「そう！　よく水面を動く玩具（おもちゃ）！」

よし。

よくわかった。

俺は喧嘩を売られているんだな。

「え？　なんでそんな怖い顔するの？」

またも傾いたティノアの身体が、更に傾き十二時の位置を指して止まる。

再開だ。

俺の右手首に巻かれた樹枝の束。

一見すれば無骨な腕輪で。

しかしよく見れば微細な光彩を放ち、光を蓄えているのがわかる。

俺の感情にそってくれたように強い光を放ち、数本の枝が腕輪から離れ互いに絡まる。

束ね、結ばれ、出来上がったのは木の刀。

俺の手に馴染み、離れることのない木刀は次第に白い光を宿していく。

それをしっかりと利き手で握り直す。

全てが白い光に染まり、溢れ出した光が足元にあった水を蒸発させるように消していく。

その光を消すように。

白い画板に色を塗るように。

腕輪から生まれた翠光を木刀に込める。

白い布に滲んでいくような翠色が木刀を埋め尽くす。

足下から無くなった部分の水を埋めるように軽い波が起きる。同

時に木刀から漏れでた翠光が水面全体を波立たせる。

「借りるぞジェイリー。あの蒼色を掻き混ぜてやる」

今は遠くにいる家族を思い出して。
見えない水面に浮かぶ少女に挑む。
逆巻く風を内に。
蒼(ティノア)を吹き飛ばす翠(ジェイリルディアンス)の輝色を刀に込めて。

その翠が輝いて

木刀から漏れでた翠色の流れを柄から開放する。
例えるならそれは光子の風。
それを推進力にして、五メートル程の高さに浮かぶティノアの元に飛ぶ。

――思いっきり叩き斬ってやる。

そう思って。視界を染める蒼い光に対して勢い良く振るった一太刀目は。
ティノアに届くことなく、彼女の身体を覆う『波』に止められた。

「いきなりなにするのよ！　危ないでしょ！」
「何が危ないだ！　しっかりと止めやがって！」

ティノアにまとわりつく青より蒼い色の流れが、重なり合わせた分厚い布のように木刀を受け止めた。斬線を刻めたのは薄皮一枚。細い翠の線が残光だけを残して消えていく。

「もう。やるならやるって言ってからにしてよ」

もう一閃。そう思ったところでティノアが手を軽く振る。指先に着いた水滴を払うように。
俺に飛び散ってきた蒼い光。水滴のような光の一粒一粒が爆発したような衝撃を生み、俺の身体を弾き飛ばした。
六階の教室から自由落下した時の恐怖とは比べるべくもない。
高速で視界が回り、壁に叩きつけられた。

「痛っ……！」

壁を木刀でガリガリ削って水面に浸かる。

ティノアは「へへン」と胸を張って俺を見下ろしている。

優雅に浮かびやがって。いちいちその高さまで飛ぶのは難しいんだぞ。

しょうがない。独りでやるのは初めてだけど試してみるか。

（翠色輝術（ファンアーツ）《翠舞（プレーション）》）

テーゼに登録してもらった輝術の記号を頭の中で独りごちる。

ティノアの周りに、宝石と見間違えるような無数の翠球を生み出す。

浮いたまま動かず、只々輝いている翠光は、蒼い空でも輝きを失わない星のように輝く。

翠色輝術《翠舞》と言うのは簡単に言えば、方向性を明確にした推進力だ。

羽のない人が、空で舞う為の翠色の風。

翠色の渦巻く光。それを踏みつけることで自らの身体が風になったように飛ぶ。正確には飛ばされるのだが。

一度発動し設置したのなら方向と速度の変更は効かない。

しかも制御が非常に難しい。

砂糖を手づかみで目的の量に合わせるような神経を使う調整が必須だ。

俺にこの翠光を貸してくれた奴から言えば、その輝きにどれだけの「私」を溶かすか、という問題らしいのだが。俺にはそれを理解できない。

力強い踏み込みも助走もいらない。
その翠球を足元に作り出し、その上に足を置き、軽く体重をかけた。
「へぇ〜。ジェイリーの輝色使(レディアンス)うんだ〜。私じゃなくてジェイリーの。――許さないんだから」
ティノアの足元の水がせり上がり、透明な正十二面体を作り上げる。それがくるくると回転し始めた時。
俺は足の裏に隠した翠球を踏みつけて。
水平に、ティノアの真下に飛ばされて。
新しく生み出した《翠舞》による翠球を生み出し。
更に踏んで、垂直に跳び。
ティノアの背後を取った。

俺自身の体感時間では三秒。しかし客観的には一秒に満たなかっただろう。
テーゼの枝を束ねた木刀『束枝(インステンス)』を持った俺は、少し五感が鋭くなる。
例えば、先程ティノアが払った光の水滴。あれは拳銃から発射される弾丸の初速を遥かに凌駕する筈だ。それが目で認識できる。それほどの動体視力が今の俺に宿っている。
光色輝術(リベラルアーツ)によって肉体を改めて強化しなくても。
「あれ？　イッヤ？　何処に――」
俺を見失ったと思われるティノアの声と同時に。後ろから翠の斬線を刻むべく木刀を振るう。一撃が彼女の肩に入る。けれどティノアはまるで応えていない。

いきなり後ろに現れた俺に驚きながら。その方法を簡単に見破ったティノアがまくし立ててきた。

「い、イツヤ！　《曝風（イクスパロー）》をそんな風に使っちゃダメでしょ！　それは相手を吹き飛ばすために作られた輝術よ！　自分から吹き飛ばされるなんて、何考えてるの！　輝術に込める輝色の量をちょっと間違えたら壁にクチャっていっちゃうのよ！」

必死に俺に怒鳴ってくるティノアの顔はどこか必死だ。

例え壁にぶつかってもテーゼの枝を借りて、ティノアと同じ『波』で身体を被ってるんだ。狙撃銃の強装弾が当たろうが、暴走した十tトラックが突っ込んでこようがそう簡単に死にはしないんだが……？

「クチャって何だよ……ああ、トマトを壁に投げつけた感じか？」

さっきもなりそうだったんだけどな。

「え？　……うん。そんな風になっちゃうから――ってまた！」

ティノアに目線を避けるように。水を切るように走る。

俺のひざ下の高さに設置した翠球に飛び乗って、翔ぶ。

予め何処に移送されるか決定してある翠球は俺の身体を予定通りに運ぶ。花火が弾けるようにパチパチと音を鳴らしながら。

更に。飛ばされたところに設置してあるもう一つの翠球を飛ばされながら踏む。

自分を遠くから見たら、翠色の球体に弾き飛ばされてるように見えるんだろう……な！

手にした木刀を振る。
一閃につき一枚の『波』を切り裂いて直ぐに離れる。
離れるときはティノアの水滴を食らわないようにつま先に生み出した翠球を蹴りつける。
光色輝術を使用するための力である輝色（レディアンス）。俺の思い通りの量と方向性を設定した翠球は、視界こそぐるぐる回るものの予め何回転して地面にたどり着くか分かっているので体勢の立て直しも速い。
斬っては離れる。一撃離脱の戦い方を繰り返す。

「だ、駄目だって言ってるでしょ！　イツヤが死んじゃったら……きゃ！」

何だよティノアの奴。
さっきから何にもせず受身ばかりじゃないか。
まぁ俺は何度も切りつけておきながら、ティノア自身は少しも斬れてはいないんだけど。
ティノアにまとわりつく一枚一枚の波を少しずつそぎ落としていく。
一枚一枚。何百枚も重なる蒼色の『波』を翠の刀で。

「も、もう！　駄目だって言ってるでしょ！　《攫取（スウェープ）》！」

ティノアの声と共に。ティノアと同じ高さで止まった正十二面体のそれぞれの面から蒼い光が溢れ出た。幅の広い、投射されたような光が本体に合わせて回転する。蒼色の光が文字通り四方八方十二方に広がり、高速移動する俺と、動かない翠球を搦めとって水面に叩きつけた。

「くそ！」

俺は網のように絡まる水の流れに囚われ水面に縫いつけられてしまった。

《翠舞》によるめくらましの為に輝色の量を適当に込めた翠球も俺と同じように水面に叩きつけられる。癇癪玉(かんしゃくだま)程度の軽い破裂音が十二、十三と響く。

そんな音が響く中で。最後の一つがひときわ大きな、落雷に似た爆発音を響かせた。この部屋に満ちた水をかき集めるように渦を巻き、間欠泉のように吹き上げる。その衝撃で広大な室内全体が揺れ、水面の下の床には反動で直径二十メートル程の穴を開けていた。その衝撃で俺を縛っていた蒼い網が解れ、俺は立ち上がることができた。

……あぁ。あれは輝色(レディアンス)を込めすぎだった。もしあれを踏んでいたら人間魚雷になって何百メートルも飛んでたな。

けど……。

「結構綺麗だな。蒼い水煙を纏って立ち昇る翠の柱って。帆船のマストみたいだ。ティノアもそう思うだろ？」

「そう思うだろ？　――じゃあないわよ！　何考えてるの！？　あんなの踏んでもし壁に当たったらクチャどころじゃあないわよ！　あれ一つだけで立派な輝術じゃない！　あんなのが作れるなら移動するためじゃなくて私にぶつけなさいよ！　危ないでしょ！」

なるほど。そういう考え方もあるのか。

一つの術だけでも色々と応用が利く。それが翠色輝術の強みでもある。ティノアの姉妹で一番奔放という言葉が似合うジェイリー・ランリーフ。彼女から借りた輝色は俺の一番のお気に入りだ。

「それじゃ、そうしてみる」

「え？」

せっかく提案されたのだからその通りにしてみるとしよう。

木刀の先に翠球を添えるイメージ。輝術の強弱を決定する輝度（ルミナンス）は《翠舞》の五～八倍。恐らく先程の間欠泉の半分程度。意図的に込めるのならこのくらいが限度だ。もし失敗したら自分が吹き飛ばされかねない。

まずはイメージ。予行練習。

押し、推める。方向は木刀の切っ先から直線。攻撃範囲である射（フラ）光（ックス）は円錐状に広がるように。

出来るかな？　分からないな。取り敢えずやってみよう。

「《翠粋（エセンス）推》」

思いつきで付けた名前を、木刀に刻みつけるように口にする。

「ちょ、ちょっと待ってイツヤ。私が言ったのはイツヤが使ったら危ないから駄目、って言ったの。誰に向けるかじゃなくて――」

身体を軽くひねる。腰の回転で、手のひらを柄の裏側につけて、木刀に溜め込んだ翠光を押し出す。

かつ、と。木刀の先が壁に当たったような音が鳴る。木刀の先が煌めく翠球に当たり。俺の肩が吹き飛ぶような衝撃と同時に。木刀の先から稲妻に似た輝きが走った。

それは家族を繋ぐもの

雷のように枝分かれした翠の線がそれこそ雷鳴のような音響で『攫取』を発動するための蒼色の正十二面体をズタズタに引き裂いた。
自由落下し、水面に落ちて混ざるただの水の塊の音。
驚きで止まっていた俺の思考がその音を合図に復帰した。

「なんだ、今の？」

てんでイメージとは違う発光現象。
失敗か。やっぱり思いつきで変なことをするもんじゃないな。

「い、イツヤ！　さっきから変なことばかりして！　もう怒ったんだからね！」

ティノアが長いワンピースの裾を翻して一回転。
すると彼女の周りに散りばめられた色が、集まって来る。室内に満ちる蒼と、自身から溢れ出る蒼を混ぜ合わせて。
集まった蒼い塊は沸騰したかのようにボコボコと内部から蒸気泡が生じる。
それが次第に形を為していく。
『刃』と『槍』
人が使うのに適さない大きさの、人の間では最もポピュラーな武器。
まるで子供の食器のような大きさ、だ。

「何だよティノア。やっと真面目にやる気になったのか？」

『不確型（スティングレイ）』
リベラリーゼにおいて大陸中の水を管理する蒼樹クラリシアの宿主であるティノアが、俺に対してよく使用する輝術だ。蒼色を這わせた水を『何か』に変化させる術である。

水さえあるならティノアの前に敵はいない。
もしティノアが地球で暴れたら地球は滅ぶかもしれない。海の水さえ全てを思うがままに操り、全てを蒼で飲み込んで。
人類は一日で絶滅するかもしれない。
……そう考えると危険だな。今度良く言い聞かせておくことにしよう。

「なによ余裕ぶっちゃって！　何か悪いこと言ったのかな～？　って思ったから手加減してあげてたのに！」

「手加減なんていらないよ。俺はもっと強くなりたいんだから」

ティノアを守れるくらいに。

「なによ！　なによなによ！　そんなに私の所から出ていきたいの！？　もう絶対に手加減なんてしてあげないんだから！！」

ティノアの癇癪を起こしたような怒声と同時に。
数百、千にも及びそうなほどの蒼色の武器が俺に迫ってくる。
けれど。この程度の輝色の量なら全部撃ち消して見せる。

（『枝分至色（ラミフィクション）』紅色輝術（ウェルアーツ）に変遷（リトール））

変遷は白を挟む。
翠色を白で消し尽くし、真っ白な木刀に戻す。そして真っ白な刀に改めて紅色を這わせる。
腕輪から伝わる色が翠から紅に変わる。ツツジのように鮮やかな赤紫色や、炎に似た緋色、薄明るい淡紅色。人が認識できる全ての赤に類する輝色達が、互いに混じり合うことなく腕輪に収まる。

《追連華（ファビューレ）》
腕輪から木刀に伝え込めた紅色の種類。ひと振りでその数だけの斬線を刻む。
混濁しない一つ一つの輝きたちは、俺が持つもう一つの刀たち。
今俺が持つこの木刀の一閃は、十の牙を持つ獣の一咬み。
迫る蒼い刃物の檻を。紅い刃で斬り刻む。

迫る蒼い武器たちの軌道に対して最小の面積で構える。
当たらない、掠るだけの致命傷にならない攻撃はすべて無視。
俺に当たる得物だけに目を向ける。

蒼い画板に紅い爪痕を幾重にも刻む。紅の残光は続いて迫る蒼い輝きを防ぐ。
一振りで十の蒼い刃を霧散させ。
一突きで十の蒼い槍を相殺する。

その動きを単調に三十回ほど繰り返す頃には。
槍と刀を形作っていた蒼い輝きが室内を蒼く満たす水に戻っていた。
実際にぶつかってみれば槍と刀を合わせても千もなかった。せいぜい六百弱。
やっぱり手加減されてるな。

「今度はリーシャの！　何で私の輝色は使わないのよ！」
「なんでってそんなの言うまでもないだろ。ティノアに蒼色輝術（クリアアーツ）じゃ何やっても飲み込まれるだけだからな」

この世界の人が持つ灯銘器と言う名の器官。
それはこの世界、リベラリーゼの神である彼女たちが与えた、輝色という輝きを生み出すための器。
ティノアとティノアの姉妹たちが分け与えた。この大地で人が生き残るための力。
総称は光色輝術（リベラルアーツ）と言う。
四色に分けられる、それぞれの、その人だけが持つ輝く色。
魔法に似たその光は。いつも俺の憧れだった。

「いいじゃない！　イツヤの食べさせてよ！　イツヤが出したのは美味しいんだから！」

美味しい？　輝色に味なんてあるのか？　まぁそんなことは御免だ。ティノアから借りている輝色をティノア自身に放っても意味はない。

「やだよ。それよりもティノア。本気でやらなかったら明日から俺、リクラの所で修行するから」

蒼閾の王都（ラ・クリア）に根付く樹に宿る女の子。ティノアとよく似た少女。ティノアの妹のようによく似ているけど、妹ではないらしい。ティノア達の家系図はよく分からない。

「え！？　何でよ！？」
「リクラの奴なら俺のこと嫌いだろうし。手加減なんて言葉とも無

縁だろうしな。王都にまでなら行ってもいいって言ってただろ？」
ティノアのことを大好きなあの娘なら、俺を瀕死にまで追いやるかもしれないけど。
「イツヤ？　ずっと言いたかったんだけどリークラールはあなたが思っているような真面目な性格じゃないのよ？　隙があったらイツヤを錐揉み殺すかもしれないのよ？」
き、錐揉(きりも)み殺す？
「まぁそうだけど。そのくらいの方が強くなれそうだし」
「あーあー！　あの子の話は無し！　分かったわよ！　けど負けたら何でもするって約束も守りなさいよ！」
「何を今更……さっさとやろうぜ」
「明日のこともあるから手加減してあげようかと思ったのに……
……もう我慢しないんだから！」

蒼い光が点いたり消えたり、チカチカと点滅する。
歩道の信号がもうすぐ赤になると教えてくれるように。
足を踏み入れるのは危険だと諭すように。

変色はしない。けれど蒼色が輝きの度合いを増す。
広がる蒼は煌(こう)々として尚、蒼(あお)々と。
蒼(そう)々とした水葬礼(すいそうれい)を執り行うことができる輝きの海。

人の意思など介入する余地もない神の輝き。
世界を創り、保ち続ける始まりの根源色。

――ティノアを縛る輝きだ。

やっとか。
さてと。
（翠色輝術（ファンアーツ）に変遷（リトール））
一歩、踏み込ませてもらおうかな。

その輝きに溺れたい

「そこまで！！」

聞きなれた声が聞こえたような気がした。けど勘違いだったかもしれない。

直後。ティノアが盾として作り出した丸く巨大な塊にヒビが入る。

同時にそれを削る翠色の掘削機の回転音が止み、大塊が鏡のように砕け散る。

砕けた氷の欠片がぶつかり合って響く幻想的な音。それに耳を傾ける暇も無く、肌に触れる感触に身が凍った。

首元に添えられたのは水を圧縮して作り上げられた、蛇のようにのたうち回って首元に巻きついてくる刃。加えて鋭い槍頭が額に軽く触れる。どちらもティノアの手から離れて勝手に動いている。

槍の先端によって皮膚の薄皮が破れ、流れてくる血が目に入ってきた。

対して俺が握る得物はティノアの首元から若干遠い。もう数十センチという距離だが、これを埋めるためにはどれだけの年月がかかるか見当もつかない。

俺が右手で握っている木刀からは完全に色が失われ、白い光と共に砕けて消えた。白い光の粒子は俺の右手に集って、元の腕輪に戻る。

水が張られた地面から約二十メートル程の高さで、蒼と翠（ティノア）（自分）が切り結んでいた数百合の時間。全てが走馬灯のように鮮明に思い出せる。
心が踊りだすような戦慄と同時に。堪らない快感が身体を支配していた。
今までで一番の充足感を心で感じながら。伴わない現実が目の前にある。

充実した内容に関わらず、勝敗を示す結果はやはり悔しい。

「また負けか……」

氷にヒビが入るような破裂音。同時に蒼色の槍頭が弾け、接していた俺の身体は衝撃によって垂直に地面に叩きつけられそうになった。
けれど床に貼られた水が、水とは思えない柔らかさを持って俺の身体を受け止めてくれる。おかげで背中を強打せずに済んだ。

人肌に暖かい水を手で掬って感謝しながら。これがティノアの温かさなんだよなと思い何故か嬉しくなる自分がよくわからない。敗北したばかりで悔しいはずなのに。

見上げると蒼の充足に比べてと翠は弾けるように儚く消えていく。
互いを侵そうとしていた色の残滓が音も無く弾け、粒子となって視界に溶ける。
蒼の方が勝者だと告げる空色の燐光が広がるのに比例して、ティノアの顔が喜色に染まる。

「いっひっひ」などと幼い外見に似合わない、年齢から考えても年を取りすぎていて結局の所似合わない声を出すティノア。

「わたしの勝ちよね？　約束通り何でもしていいのよね？」

ティノアは新しい玩具を与えられた子供のようにはしゃぐいでる。

俺とティノアは訓練と言う名目でずっと賭けを続けている。

俺が賭け続けているのは、この蒼の種都（クラリシア）から出て、一人で旅をさせて欲しいということ。

それに対してティノアは何故か憤慨と言えるほど反発してきた。

紆余曲折。

かろうじてティノアの怒りを沈めることができた後。

ゆっくりと理由を話した。旅にでたい理由を。

その後ティノアは「私が誇れるほど強くなれたなら、旅に出るのを許してあげる」と言ってくれた。

この世界、リベラリーゼは色閾（トーン）と言う名の壁で区切られている。

実体を持ったオーロラのような光のカーテンが自然的国境を形成しているのだ。国境というよりは世界の壁というべきかもしれない。

人の身では超えられない光の壁。

そんな壁によって大きく五つに分けられる色閾はそれぞれが独自の文化を築き、進歩を続けてきた。

その色閾が数年に一度無くなり、人が自由に世界を動き回れる期間がある。と言われている。

その期間を見計らって俺は世界を旅したいのだ。俺の中、正確に

は右手首に宿る奴のために。

しかしこの世界は俺みたいな子供が一人で闊歩できるようには出来ていない。

彩獣（ディアー）と呼ばれる危険な生き物が徘徊するこの世界は、人に優しくない。

この世界について無知な自分が一人で旅をするなんて無謀だと、ティノアはいつも言う。

つまりこの戦いは俺がティノアの元から巣立てるかどうかの試験であり、今回の結果は不合格ということになる。

今回も、と言った方が正しいのかもしれない。認めたくないけど。

対してティノアの賭けるものはいつだって具体性がない。

今回は「わたしの言うことをひとつだけ聞きなさい！」と言われた。

勝った後に何をするか決めるなど賭けになってはいないと思う。勝つことが前提な物言いもどうかと思うけど。

けれどティノアの賭けるものに一々何かを言ったり、訂正を求めたりはしない。

言ったとしても、自分とティノアの埋められない価値観の違いを、改めて感じさせられるだけだ。

「奴隷にでも家畜扱いでも好きにしたらいいさ」

今まで全戦全敗だけれどそういうことをされたことはなかったな、と思いつつ大きく息を吐いて力を抜く。

「じゃあ、わたしが良いって言うまで動かないでね」

それだけ？　と思った三秒前の俺に忠告したい。

既に動けなくなっていることに気づけと。

上から来るぞ！　気をつけろ！　と。

冷たい目が初めて出会った時のことを思い出させた。

徐々に近づいて来るティノアに今までにない恐怖を感じる。猛獣の檻に放り込まれた餌の気分と言うよりは、身一つで大海に放り投げられた気分と言えるどうしようもない恐怖。もちろん見える範囲には島もなければ船も見えない。一瞬木の板が見えたような気はしたが蒼色がその視界を遮るように染め上げた。

見えるのは、ゆっくりと下降してくる一人の少女だけ。

離れて見ると燐光を発していてよく見えないが、ティノアの白い肌は彼女の蒼色の目と髪をより素晴らしいものに際立たせている。

少女と言うより妙齢の美女と行ってよい雰囲気を感じさせる妖艶な笑み。それが紅い家族を思い出させて、凍らされていた思考が戻った。

「て、ティノア？　どうしたんだ？　何か怖いぞ？」

唇が震え、上半身を起こして座っていた身体が本能に従って後退さろうとする。もう無意識の行為だ。動くな、と言われたことなど気にしてはいられない。

「動かないで」

もう一度。

静かに、それでいて抵抗を許さない声が広い室内に木霊する。
後ろに下がろうと動かした腕が水に掴まれる。この室内はティノアの体の中のようなものだ。輝色を這わせなくても、その中に満ちた水を操ることは容易い。
身体が密着するほど近づき、白く小さな指先が俺の頬に触れる。冷たい指撫でられる感触に身が怯み、目を瞑ってしまう。

「んっ……」

微かな艶かしい声が目前で響き、冷たいモノが俺の額をなぞる。
それがティノアの舌で、俺の血を舐めとっているのだと経験からわかった。
慣れた行為なのでそれ自体に抵抗はない。

「ごっほん！！」

ん？何の音だ？
誰かの声が聞こえたような気がして目を開ける。そう言えば、さっきの声は……。

「うわっ」

思考が止まる行為の変化。
開けた目の中、血が入った目頭にティノアの舌が伸びてきて執拗に舐めとっていく。

「お、い！　ティノア！　なにすんだ……」

舐められた左目は痛みこそなく、目薬を挿したような清涼感に包まれている。

だからこそ冷静に。
一度顔を背けてティノアを見直す。
夜空に輝く孤独な月を連想させていた肌は僅かに朱色に染まっていた。焦点の定まらない瑠璃色の瞳が濁った水たまりのような虚ろなモノに変わっていく。

俺を見ていないような気さえする。
こんなにも近くにいるのに。

「……イツヤ」
「なんだよ」

余りにも怖くて反射的に出た声は、震えていたのが自分でもよくわかるほどだった。
いつの間にか手を縛る水の感触が消えていた。
「動くな」と言われたことも忘れ座ったまま手を使って下がろうとする。
けれど手が水を切る寂しい音がするだけで身体が後ろに下がらない。
後ろを見ると水で出来た壁があって、弾力のある表面が下がろうとする俺の身体を止めていた。

「イツヤ……イツヤぁ……」

怖い！　怖い！
ねっとりと撫でまわすような指使いに、耳に吹きかかる空気中の水分さえも凍らせられるような冷たい吐息。
もう、なんというか。
ティノアの全てが怖い！

「大丈夫よ……すぐに何も考えられなくしてあげるから……」

ティノアに似合わない、薄いピンク色の唇が近くなって。

ゆっくりと瞳がのぞき込まれて。

俺の視界がティノアで埋まる。

もう、蒼しか、みえない。

それは世界を繋ぐもの

「クラリシア様。お戯れはその位にしておいた方がよろしいですよ」

「おわっ！！」

渋い声が響き、俺の背もたれになっていた水の壁が崩れた。
ぱしゃという音共に俺の身体が水面に浸かる。
ぶくぶくと、水中で空気を吐き出す音が鳴る。
ただここの水に浸かっても呼吸ができなくなったりはしない。

「ぶくぶく」

敢えてもう一度水に浸かって息を吐いてみた。
足湯程度の温かさが気持ちいい。水面に身を任せているので全身浴になってるけど。

「邪魔しないでよサイバル！　人間たちがこういうことするときは、見てみぬ振りをするのが常識じゃあないの！？」
「……本当に何をされようと……あ、いえ、仰らなくて結構ですよ。聞きたくありませんので」

いつの間にか抱き合うような体制になっていた俺たち。そのすぐそばで跪いている人がいた。
俺に馬乗りになっていたティノアは、その人物に食ってかかるように詰め寄っていた。

長いローブに身を包んだ男性はサイバル・ロッシ。蒼の種都を治めている教会の教区長という役職に就いている人。つまりはこの都市で二番目にえらい人だ。（一番はティノアだ）
人嫌いなティノアに物怖じしない、というだけでも恐ろしい人物ではある。
――ティノアに殺されようとしていた俺を助けてくれた人でもある。
額を片膝に付け、跪いた姿で目を合わせないように。我侭な主をなだめる我慢強い執事のような言い方で話し続けていた。

サイバルさんがそんな姿勢で話しているのにはいくつか理由がある。リベラリーゼ、特に蒼閾（クリア・トーン）には全ての都市を川が繋いでいる。ナイル川のように幅広い川がそれこそＪＲの上下線のように。交易には欠かせない物となっている航路。
それを管理しているのがティノアなのだ。人には手の届かない自然の管理。そんな存在を神のように崇めている組織が教会、正確には教樹会（エクセプ）という。その一員が崇め奉る存在の目前に居るのだから当然と言えば当然の態度なのかもしれないが、俺みたいな一介の日本人からしてみればよく分からない感覚だ。

あ。あともう一つ理由があった。
こいつには光色輝術以外にもいくつかの能力がある。その内の一つが水を「服従」させることである。
それはリベラリーゼに流れる水も、人間に流れる水分も例外ではない。ティノアに近づいた生物は否応なしに、飽く迄も自然に屈服する。地に這い蹲るものも居れば、何かしらの耐性を持って跪ける人も居る。跪けるだけでも少数派なのだが。

俺はティノアと同等の存在に根付かれているのでその能力が効かない、というか届かない。

「イツヤ君。君も気を抜いている場合じゃありませんよ。訓練をするときは必ず私を立会人として呼んでおくこと、と言っておいたでしょう？　わたしが偶然ここに来なければ、その綺麗な顔に穴が空いているところでしたよ」

動かないはずの身体をゆっくりと動かして。俺の方を見てくるサイバルさんの瞳からは感情が読めなかった。

「もう！　私のイツヤを変な目で見ないの！　許すからさっさと立ちなさい！」

ティノアの許しを得て立ち上がったサイバルさんから、真っ直ぐ向けられた視線。それは少し厳しく感じられた。俺はそれに対して「ああ、はい」と謝ることしかできなかった。「何言ってんだあんた」と言いたい気持ちはあったのだが。

「しかし、この惨状を見せられれば呼ばれなくて助かった、と言えなくもないですが」

サイバルさんが悲しげな顔で室内を見渡したので釣られるように周囲を見渡した。

「うわ」と思わず出た声は、これを自分達がやったことと認めたくないほど酷い有様だったからだ。

爆心地、という表現がぴったりの光景。太く鋭い爪で抉られた、と感じさせる断面の破片が水面を揺蕩っている。

時代を感じさせる優美な装飾に覆われていた内壁は、細い線のような跡で幾重にも傷つけられていた。多分稲妻に似た発光現象が原因で傷付いてしまったものだろう。あの術は改良の余地ありだ。テ

ーゼと話して詰めておくとしよう。
見上げても遠すぎてはっきりとは識別できないが、天井には渦を巻くような紋様が刻まれている。あれは元々あったものではなく、最後の術が逸れて出来てしまったものだ。本当はこの樹の雄大さを余すことなく伝える壁画が描かれていたのだが、見る影もない。というかあんな所まで飛んでいってたのか。やっぱり俺だけで制御できない輝術（アーツ）は駄目だな。もっと練習しないと。

床には傷が付いていない。ように見えて実際は大きな穴がいくつも空いていて、真っ黒な部屋の外側が見えている。

遺産とも呼べる貴重な造形物を、ここまで見るも無残にしてしまったことに少なからず心が傷んだ。
例えすぐに直るのだとしても。
半分以上は部屋の主であるティノアのせいだとしても。
この部屋は陽光の届かない深度の水中。水中にある広大な地下室。それが蒼の聖域と呼ばれている、クラリシアの核が座している場所だ。
俺とティノアが賭け試合をするときはいつもここでしている。こんな惨状を街中で引き起こしたら大災害ものだからな。

そんな災害をものともしない水柱が輝きを取り戻していく。先程までは只の黒い柱だったのだが、ティノアが戦闘をやめたことで機能を復活させたようだ。

室内の中心にはティノアと同じ蒼色の光を持つ水天柱（リチュアル）と呼ばれるこの樹の大黒柱が伸びている。その柱に巻き付くように伸びている螺旋階段にだけは傷一つない。

世界を結ぶ柱である水天柱は光色輝術（リベラルアーツ）では傷を付けられないのだ。

「まぁ、彼がここまで成長してくれたことを喜ぶべきでしょうか」

俺のことなのにティノアを見て告げられた言葉に、あまりいい気はしなかった。

「当然よ！　イツヤはわたしが育てたんだから！」

「出会い頭でイツヤ君に大怪我を負わせたのでは飽き足らず、殺害しようとした方が言う台詞ですか？」

教会に所属する身であれば。いや、この大地で暮らす者であれば誰もが信仰の対象とするティノアに、こんな風に口が聞けるのは俺の知る限りサイバルさんしかいない。

……というか死にたいんだろうか？　サイバルさんが言ったとおり、俺は初めて会ったときに問答無用で殺されかけたのに。それにサイバルさん自身も何度も殺されそうだったのに。

「あれは、少し気が立っていただけなの！　今はわたしの家族なんだから、わたしの大事な人なの！」

俺のトラウマは、加害者の気が立っていたからと判明した。ついいらいらしてやった、ということだろうか。

「クラリシア様がイツヤ君の家族ということを否定はしませんが……」

「違うわよ！　イツヤがわたしの家族なの！」

何が違うんだよ、というつっこみはさておき。一時間から二時間ほど動き回っていたので結構疲れた。

一回家に帰ろうか。向こうはもう良い時間のはずだ。

それは飽くまで蒼い輝き

「じゃあお二人とも。俺は家に帰るのでごゆっくり」

言い争う二人に手を挙げてさよならの合図。

この部屋の中心に足を向ける。

「イツヤ！　ちょっと待ちなさい！」

「ぐりゅうぇっぷ」なんて普通に生活しているなら絶対に出ない声が俺の口から出た。

首を弾力のある水の輪で締められたせいだ。

ティノアの手には青い紐の束と見間違えるような質量を持った輝き。輝きを束ねて縄のようにくくり、輪を作って輪投げのように投げたのだろう。

俺の首に向かって。

言うことを聞かない犬の首輪を引っ張るような、躾に似た所作。

やっぱりティノアにとって俺はペット扱いなのだろうか？

「な、何すんだよ」

ティノアに呼び止められて振り向くと、いきなり抱きしめられた。

「服、すごいことになってるからここで脱いでいきなさい」

ティノアがいきなり俺の服を脱がせようとする。破けた服の肩口から血が滲んでいるのが見えて、また舐められた。

改めて、というか今まで気付かなかったのが不思議なくらい俺

の服はボロボロだった。
薄い巡礼服の上に着ていた分厚いコートには虫食いのような穴が所々空いていて、右腕の袖は腕の関節から先が無く肌と腕輪が露になっていた。恐らく自分でやってしまったことなのだろうが。

「普通の服だったらそうなっちゃうのは当然なんだから、わたしのあげた服を着なさいって言ってるでしょう？」

服って……あれは……。

「ティノア。男は、ああいうヒラヒラした服は着ないんだ。何度も説明しただろう？」

ティノアが言っている服というのは自身が着ているのと同じ、白と青のワンピース。当然の如く女ものだ。一目見ただけで金がかかっているなと思わせる複雑な装飾は、明らかに戦うのには向いておらず、普通に歩くだけでも鬱陶しそうなことこのうえない。あんな服を、幼い頃の自分が着せられていたことを考えると、寒気どころか吐き気がする。
そうはいってもティノアのような（外面だけの）美少女にはよく似合っている。優美でありながら清楚に感じる色合いは着る人の印象を（乱暴な内面とは違う）色合いと同じ物に変えている。

「じゃあイツヤはどんな服が着たいの？」

着たい服？
今着ていたのは教会から貰った黒い巡礼用の服だ。旅する者のために作られた服は見た目は質素ではあるが丈夫で軽い。全体が黒一色なので汚れも目立たず何日も着回せる便利な服だ。少し寒いので、上から分厚いコートを羽織ってはいたのだがそれは既にぼろ布に変

わった。

「今着ているような軽い服がいいな。単純な色合いで、動きやすい服がいい。サイバルさんが着ているような、ごてごてした分厚いローブのような服は嫌いだな」

「イツヤ君これは意外と軽くて通気性も良く、様々な機能が付いていて便利な服なんですよ」

サイバルさんの顔が若干沈んでいるように見えたのは……気のせいだろう。この能面のように表情の変わらない人がそんな風に感情を表す訳がない。

ティノアがふむふむ、と何かに納得したように頷きながら、何かを考えている。その間も俺の服を脱がして、というか破りとっていって上半身が裸になってしまう。

こいつは何がしたいんだ？

まぁ、この樹の一階に行けば着替えが有るからいいか。

開放された後、部屋の中心にそびえ立つ水柱を中心軸に作られた螺旋階段を登る。見ているだけでも不安定と分かる、決して足場になどしたくない今にも折れそうなデザインは急ぎ足で登れば目が回ってしまいそうな程に急なのだが。慣れればどうということはないものだ。世の中慣れだけではどうしようもないものもあるが。

一階にある棚から服を取り羽織る。素肌の上にコートを羽織る妙な格好になってしまった。

下ではティノアとサイバルさんが二人で仕事の話をしている。何でも大事な話らしく長くなるのでと言われたのだが……。

まぁ俺が気にしても仕方のないことだ。さっさと家に帰って寝るとしよう。

「テーゼ、起きてくれ」

自分の中にいる、正確には右手首に巻かれた腕輪に呼びかける。
俺に巻き付く根も葉もない樹に。
幸いなことに。今回はすぐに起きてくれた。

（……もう朝ですか。全然寝たりません）
「いやこっちと違って向こうはもう夜だと思うけど」

俺の頭の中に響く声はとても寝ぼけた、というか惚けた声だった。
呆けたと言った方がわかりやすいかもしれない。

（もう帰るのですか？　ティノアとイチャイチャしなくていいのですか？）
「そんなことをした覚えはない。……ってもしかしてお前起きてたんじゃないだろうな？」

寝たふりか。サボリか。
お前が協力してくれないから今日もあっさり負けてしまったじゃないか。

（いえいえ。ずっと寝ていましたよ。イツヤがティノアの誘惑に負けて溺れそうだったことなど知りません）

……これはテーゼの引っ掛けだ。ここで『起きてたんじゃねえか！』と突っ込めばその事実を認めることになる。ここは冷静に『そんなことするわけないだろ』と言わなければ……いや、もう駄目か。
（まぁそうやって考える時点で筒抜けですからね）

「そうだな」

俺はこいつに隠し事はできない。
考えたこと、思ったこと、全て伝わってしまう。対してテーゼが胸の内で考えていることは俺にはさっぱりわからない。

不公平だよな。
（そうですね）

寝起きの脳内会話終わり。
互いに納得して俺は右手をかざす。
蒼く光り、重力に反して上へ上へと昇り流れる水柱に。

腕輪から溢れさせた白い光を水柱に混ぜる。

くるん、と。
一瞬時が止まったかのような感覚の後には。
反転という表現がピッタリ当てはまる視界の変化。

世界が逆さまになったような錯覚を引き起こす浮遊感が生まれ、
重力に従うことを覚えた下へ下へと　流れる水柱に飛び込む。
白い光と一緒に。

「行ってきます」

俺は異なる世界から一歩を踏み出し。
生まれた世界に出かける。

よくある朝の輝きで

（おはようございます）

俺の中に根付いている樹は最近益々目覚まし時計の代わりとなってきている。

（失礼な。目覚まし時計とはなんたる物言いでしょうか）

スルーだ。起きたばかりで寝ぼけてるからうまい言い訳が思いつかない。

（一回目ですよ）

スルーは一日三回まで。テーゼとの約束その一。

こいつに起こされると現実が夢のように感じる。
起床時にのみ発生する灰色の靄がかかった視界の向こうで。
凍えるような寒さの部屋に、春の暖かい日差しが差し込む。

……？　ああ、そうか俺は昨日自分の家に帰ったんだ。
目覚めてすぐ。自分自身が抱いた訳の分からない感想を疑問に思った朝。
現実と夢の狭間である微睡みの時間を親しむように嗜んでいたとある日。
冷たく柔らかい感触と、涼しげな香草に似た香りに目が覚めて。
鈍く感じる朝の頭の回転が、とりとめもないことに対して働き始めた。

いつもと変わらない朝とはどういうものを言うのだろうか。
同じ時間、変わらない朝日に照らされて起きることを言うのだろうか？
それとも起きてから同じ習慣を繰り返したり、同じ出来事が起こったりすることを言うのだろうか？
……どうでも良いことに朝の貴重な時間を費やしてしまったことにため息をつきつつ。
ベットと机、一割も埋まってない本棚と、デジタル時計しかない殺風景な自分の部屋で。
知らない間に隣に眠っていた氷枕……じゃない、少女の顔を見つめた。

青い髪はそれ自体が光っているように見えて、朝の光に照らされた室内は青く見える。長い髪は風が吹いたわけでもないのにふわりと揺れる。サラサラと流れる心地の良さは、緩やかな速度の清流に手を掠らせたようで。
意味も無くその髪に触れる。
水の透明感を持った少女。今にも消えてしまいそうな儚げな女の子。
布団の中が妙に寒いと思ったらこいつのせいだったのか。互いに抱き合うような形で寝てしまっていたため接触部分である腹の辺が妙に冷たかったのだ。

「おい、ティノア。起きろ」

剥き出しの冷たい肩にふれ、軽く揺らす。相変わらず細い腕だ。真っ白な肌は血が通っていないように生気がなく、力を加えれば骨がポッキリと折れそうな程に頼りない。ただ氷のように冷たい肌はスベスベでぷにぷにで何時までも触っていたいほどに気持ちいい。無意識に絡めてしまった指先はまるで氷細工のようで。触り続けた

ら溶けてしまいそうだった。
肩を撫で、頭の後ろに手をやって本能のままに思いっきり抱きしめてしまった。
……まて、これじゃあ俺はただの変態じゃないのか？
（ようやく気づきましたか。紛うこと無き変態ですよ）
頭に直接響いてくるテーゼの声を聞き続けていると寝ぼけた頭が冴えてくる。カフェインをゆっくりと、大量に摂取した時のように。
（興奮したのですか？）
「怒ってるんだよ！」
誰に言われても構わないが、お前にだけは言われたくない！
「イツヤ……だめ……」
起きたのかと思ってティノアから咄嗟に離れた瞬時の挙動。それは俺の小者ぶりを如実に表していた。
（小者というよりは小心者かと）
（似たようなもんだろ）
何が違うんだよ。
「ズボン……より……スカート……似合う」
こいつ。また昔の夢を見てやがるな。俺にとって悪夢でしかない夢を。

「……さっさと」

脇に腕を通して無理矢理抱き起こす。小学生ぐらいの体格と重さであるティノアを持ち上げるのは簡単だった。

（あなたと比べても大差は無いのでは？）

人が気にしていることをあっさり言うな。もうすぐ伸びるんだよ。

「……ティノア！　いい加減起きろ！」

ティノアの耳元で叫ぶと大きな目が気だるそうな色を持って半開きになる。瑠璃色の光が差し込んでいるような、彼女の髪と同じ色。けれど髪の方が僅かに明るい。

水色のワンピース型の服を着ているのを見てふと思ったのだが、彼女を遠くから見たら白昼であっても青い人魂が見えるかもしれない。

人魂少女ことティノア・クラリシア。

彼女の輝きは朝日よりも眩しい。

何時だって掴める輝きだ

「あれ……イツヤ？　……どうして？」
「それは俺の台詞だな。お前こそどうしてこっちに来て俺の布団で寝てるんだ？」
「えっと……なんで……だっけ……？」

ティノアの目は焦点が合っていない。まぁいつも通りではある。姉妹と似て、こいつも大抵寝起きが悪い。仕方がないのできちんと目が覚めるまで雑談にでも興じようか。幸い起床した時間はいつもより早かったので余裕はある。

「お前、どんな夢を見ていたんだよ」
「ゆめ？　……そう……ざんねん。面白かったのに」
「そうかい。そりゃ残念だったな」

ったく。どんな夢を見てたんだか。いや、スカートと俺の名前と言う二つの単語が聞こえただけで大体分かるのだが。分かってはいるんだ。忘れさせたかっただけで。

「イツヤのせい」
「は？」
「イツヤが起こしたから夢の続きが見れなかった」

ティノアの目がとろんと溶けそうなほどに半分閉じていく。半分寝てるんじゃないかと思うほど。

「はいはい。そりゃ悪かったね」
「償って」

「償うって……何をだ？」
「私の見てた夢の続き」
「お前の頭で行われた幻覚体験なんてどうやって償えというんだ」
「別に難しいことじゃないわ。ただ私のあげたスカートを履いてくれれば痛い！」

ティノアを支える手を離し頭を叩く。こいつは基本浮いている。身長差はあっても頭を叩くのにはこちらも立たなければならない。……決して俺の身長が低いわけではない。

「なんで叩くのよ！」

声色がいつも通りに戻った。
やっと起きたか。

「まだ寝ぼけているようだったからな」
「目は覚めてるのに……酷い」

目が覚めているなら尚更だ。

さてと。枕元に置いてあるデジタル時計に目を向けると余裕を持って行動するのには丁度いい時間だった。

「目は覚めたか？　それじゃ下に降りるぞ」

朝練もしなければならないし。
学園に行く準備もしなければならない。

「ティノア。ちゃんと足を床に付けて歩いてこいよ」

ふわふわと俺を見下ろす位置に浮かんだまま、移動しようとするティノアに対して注意しておく。
こいつは放っておいたらドアやら壁やらすり抜けて行くからな。

「えー。イツヤの家の中ならいいじゃない」

子供のように、……子供の見た目に反しない仕草で文句を言うティノア。

「えーじゃない。家の中で慣れておかないと外に出たときに飛んでしまうかもしれないだろ。こっちではちゃんと歩いておけ」

何で俺がこんなことを注意しなければいけないんだ。ティノアもいい年をした大人（見た目はともかく年齢だけは）なのだからいちいち言われなくても今根付く世界の常識など察して欲しいものである。

（貴方がそんなことを人に注意できる程常識的な人間だとは思いませんが）
（お前こそ。人に言える程出来た人格だとは思わないけどな）
（御尤もです）

認めるなよ。俺の憤りが行き止まりで行き場を見失ったじゃないか。
「えー」というティノアにもう一度「ちゃんとしなさい」と言い直す。
子供にいけない仕草を直すように注意する親というのはこういう気分なのだろうか。
……いや違う気がする。

「もう。歩くのは嫌いなのに」

不満を隠そうともせず、小さな足が音も無く床に付く。

重力に縛られればこいつもかろうじて人間に見える。まぁ新種の発光人間としてだけど。

ティノアの冷たい手を引っ張って階段を下り、リビングに向かう。

夜空に浮かぶ星や月と違って手が届く輝き。

ティノアの手はいつだって空いている。

それは目指すべき輝きの終着点

朝日の輝きというのはとても単純だな、と最近よく考えている。意思の無い単純な輝きは羽虫を寄せ集める街路の電灯や、手に収まる懐中電灯の光と大差がない。いくら巨大で雄大で類するものが無い輝きだ、とは思っても所詮見上げるだけの存在だ。近づきたいとは決して思わないし憧れたりもしない。そんな輝きは俺の家族のモノとは比べるべくもない。

（何が言いたいのか分からないのですが）
（家族の自慢だよ）
（……ティノアが好きなくせに我慢ばかりしているから……。ついに頭だけではなく心の中の声まで面白く……ではなく可笑しくなって――）
（テーゼ。面白くと可笑しくを使った理由を十文字以内で説明しろ）
（貴方は滑稽です）
（黙れ）

テーゼの妄言に付き合う時間はない。
リビングに降りて学園の制服に着替え、朝食の準備をする。この家の管理者だった俺の爺さんはもういない。つまり今の俺は一人暮らし。
……だけど今、俺は二人分の朝食を準備している。
片方は無駄になるのに。
作っているのは冷蔵庫に入れておいた賞味期限も分からなくなった食パンを軽くトーストしたもの。それにレタスにドレッシングをかけたサラダとも呼べない簡素なもの。まぁなにも食べないよりはましだ。

俺の家族は基本的に食事をしない。だからいつも一緒にいる俺も食事をしないことが多々あった。
けど何時だったか。五日ほど食事をせずに倒れて以来、最低限の食事は取るようにしている。
でも俺は料理ができない。練習してもさっぱりだった。余りにも不味いその出来は、俺の友人に『冷凍食品を凍ったままかじったほうがまだマシ。凍津弥だけに』と言わしめたほどだ。
つまりは食べない方がまだいい、ということだろう。

食卓に皿を並べて先にティノアを席につかせる。
……座ったまま椅子ごと浮いているが、もう何も言うまい。これもティノアらしさだ。

「それでね、試練が終わってミネアが王都（ラ・クリア）に帰ってきたんだって」

玄関の鍵も開けず、二階にある俺の部屋の窓をすり抜けて入ってきました。と住居侵入の罪を自白したティノア。向かい側の席についてパンをかじる振りをしながら、犯行の動機について話し始めた。
無論椅子の足は床についていない。ふわふわと水面に浮く浮き輪のように揺れる魔法の絨毯ならぬ魔法の椅子。文字通り種も仕掛けも無い椅子です。っていうかどうやって浮いてるんだ？　是非種明かしをお願いしたい。種都を明るく染める樹だけに。

「それで？」

ペットボトルに入れて持って帰ったクラリシアの水を二つのコップに移し、氷を一つずつ入れて片方をティノアに渡す。ティノアも水分は取る。最近の好物は果汁百％のりんごジュースだ。

「だからイツヤも会いに行ってあげたらどうかなって」

ふむ。ティノアにしては気が利く。

情状酌量の余地あり、と。酌量軽減で一ヶ月ほど浮遊禁止の有罪判決。執行猶予一日といったところだろうか。

「ふーん。ミネアがね……」

ミネア・ミネンス。初めて知り合ったのは確か俺が森の中に放り投げられた時だったか。

ちゃんとした名前はミューネリア・ラ・クリアという。蒼の色閾、第一王都のお姫様だ。

懐かしい友人の顔が脳裏に浮かんでシャボン玉のように弾けて消えた。綺麗なものこそ儚いものだ。

「だから今、行こ？」

……そういうことは昨日の内に言っておいてもらいたい。そういうことならこちらに戻ったりせず学園なんて休んだのに。

ティノア誘っているのはリベラリーゼと呼ばれている異世界である。もう何度も行ったり来たりを繰り返しているので気後れこそしないが消極的にはなる。せっかく手間をかけて帰ってきたのだ。学生らしく学園には行かなければならない。

けれどこちらで時間を使うことに少しの焦りもある。

（私との契約を忘れてはいないようで何よりです。ですが忘れてくださっても構わないんですよ？）

テーゼの声は飽く迄も平坦でいつも通りだった。

（……忘れるわけ、ないだろ）

テーゼに習って俺も同じような声で言葉を返す。けれど俺が隠していた感情を読み取ってか取らずか。テーゼは更に言葉を続ける。

（まぁ私の寿命が半分になってしまったとはいえ、あなたよりは長いのですから。瑣末な寄り道など問題ではありませんよ。貴方が死ぬ前に、しっかりと私を消してくれればいいのですよ）

（……ちゃんと消さずに還してみせるさ）

俺は決意を新たに言葉を紡いだ。

黒点に囲まれた、真っ白な始まりの輝点にテーゼを還す。

そのために。リベラリーゼに点在する姉妹にもう一度、直接会う。

そしてリベラリーゼの最奥。もう滅んだ色閾と呼ばれる玉石混淆とした輝きの泉。耀都（ルミナスティ）と呼ばれるその都市に。

――きっと。

「イツヤ？　私の話し聞いてる？」

「ん？　ああ。聞いてるよ」

いけない。ちょっとテーゼに意識を向けすぎたかな。

普段は俺の感情なんて歯牙にもかけないくせに、俺がティノア自身の嫌いなものに意識を向けると何故か敏感に反応してくる。こういうところは無駄に鋭いよな、ティノアって。

「そう？　じゃあ早く着替えて行きましょう？」

「は？　着替え？」

「うん！　これ！」

そう言ってティノアが元気よく薄い胸元から取り出したのは服で

も布ですらもなく。ただの蒼い樹の枝だった。
ティノアの白くて薄くて柔らかい胸から出てきた枝を手渡され、俺はそれをティノアと交互にずっと見つめていた。
枝はティノアの体温に冷やされていたのか結構冷たい。

（……見つめすぎです。この変態）
（……すいません）

テーゼの冷たい声に俺は反射的に謝ってしまった。

分譲される輝きは

「……ティノア」
「なに？　早く着てよ。せっかく作ったんだから」
「……これを着ろと？」
「うん。綺麗でしょ？」
「ああ、うん。綺麗だな……で？」
「でって……何が？」
「いや、うん、ちょっと待ってくれ」
（教えてくれテーゼ。俺はどうすればいい？）

着替え、と言われて渡された枝。俺はその枝をどう着たら良いのか分からず少し錯乱してしまった。俺の言葉では言い表せない、枝に対するティノアと俺の認識の差。その埋められない、違いすぎる常識と感覚の気持ちの悪さ。それに俺は酔ったような吐き気を感じていた。

（イツヤ。落ち着いてください。それは服と言うよりは装身具です。右手で思い切り握りつぶしてみてください）
（握りつぶす……こうか？）

ティノアの髪を束ねて結ったようにようにも見えるその枝を俺は強く握りつぶす。
そうすると枝が折れて砕けていく。
そして光の粒子に変わって枝の欠片が俺の服に染み込んできた。
そして俺の服の繊維を駆けずり回るように蠢いた輝きたちが学園の制服におかしな模様を刻み込んだ。

「……なにこれ？」

これは……制服の改造という重罪ではないだろうか？　俺は制服をこれ一着しか持っていない。つまり今日もこの制服を着ていかなければならない。けれどこんな所々に蒼く耀く模様が刻まれた制服で学園に出かければ美刃の制裁は免れない。

「えっとね。昨日延樹（ジェル）と話して作ったの。イツヤの服が自分が生み出す輝色に耐えられてないからどうしたらいいかな～って。そしたらイツヤが使う光色輝術（リベラルアーツ）と同等の輝度（ルミナンス）を服自体に通せば良いって教えてくれたの。でもイツヤの使う光色輝術は私達がプレゼントしたものでしょ？　だから同じくらいの強さを持った輝度って私自身の身体しかないわけじゃない？　だから私を少し切り取ってもらったの」

……切り取った？　それってどういうことだよ……？

（イツヤに分かりやすく言うのは難しいのですが……そうですね。ティノアやわたし、リベラリーゼに植え付けられた存在である輝樹（ディル）は厳密に言えば肉体を持っていません。四樹折々（リベラルトーン）が世界の輝きを吸い取って生み出す幻影なのです）

（……それは知ってる。ティノアに聞いたからな。『私は生きてはいないの、生まれた時からね』って言葉と一緒に）

その言葉を聞いたとき、俺はティノアに強い親近感を覚えた。

（おそらく、としか言えませんがティノアは自らを、自らの肉体を織り成す輝色（レディアンス）の一部を刻んで貴方に与えたのでしょう。とは言ってもあの子の身体から何かが失われたということではありませんから貴方が今胸の中で考えている人間らしい自己犠牲とは無縁のものですから安心してください）

そ、そうなのか。安心した。俺はてっきり臓器提供とかそういうイメージをしていたんだよ。

「つまり俺が思いっきり光色輝術を使ってもこれからは服が破けないってことか？」
「うん。あといつもは光らないのよ？　イツヤが光色輝術を使って戦おうとした時だけ光るの。他にもいくつかおまけも付け足してみたから今度試してみるといいわ」
「へぇ～何か魔法使いの装備品みたいだな。でもどうして今になって急にこんな物をくれたんだ？」
今までだって服が破けることは何度もあったのに。
「えっとね～それは向こうに言ったら教えてあげるわ。だから早くクラリシアに行きましょう？」
「ああ。じゃあ行くか」
とティノアに流されて返事しそうになっていた自分が情けない。
俺ももう少し自分を持たないとな。
行くとすれば放課後。学園が終わってからだ。
「学園から帰ったらな」
だから無難に返事をしておく。
しかしその返事はティノアにとってたいそう不満だったようで。
「……」
ティノアが無言の笑みと共に俺の方を一睨みする。
するとティノアの手の中にあった、コップに入っていた水が小さなナイフの形となって宙を浮き、俺の首元に添えられていた。
自分の思い通りにならなかったらと言って、すぐに脅迫するのは止めてもらいたい。
これは『不確かな型（スティングレイ）』
リベラリーゼにおいて、大陸中の水を管理する蒼樹クラリシアの宿主であるティノアが、俺に対してよく使用する輝術だ。全ての蒼（ク）色輝術（リファアーツ）の原型とも言うべき術。蒼色を這わせた無機物をを『何か』に変化させる術である。今回はコップに入っていた水しか使用していないので、ナイフの大きさも食事に適した大きさでしかない。
……冷静を装ってはいるがこれが結構よく切れるので怖いのである。

額に銃口を押し付けられるよりも遥かに怖い。なぜならこの真剣よりもよく切れる水の刃の味わいは、俺の体が身を持って経験しているからである。

今のティノアは凄みを持った悪魔のような笑顔。背後には鬼が見えそうな迫力だ。まさに悪鬼幼女と呼ぶに相応しい形相になったティノアがゆっくりと口を動かす。

「も・う・い・ち・ど・言わせるの？」

いつも通りの怖さだ。

……というか何を怒っているんだろうか？　別にティノアの話をないがしろにしているわけではない。ただ今日は遅くなると言っただけだ。

それで怒るとなると……。

ダメだ。俺の頭では分からない。

こいつは人間とは違う感性で動いているので時々訳のわからないことで怒ったり喜んだりする。人の短い一生とは違って、悠久とも言える、気の遠くなるような時間を過ごしたらこういう性格になるものなのだろうか。

でもこいつの姉妹はそれぞれ方向性の違う奔放な性格をしていたものだが……不思議だ。

まぁ初めて出会った時に問答無用で殺しにかかってきた頃のことを考えれば、こいつも随分と丸くなった、というか成長したものだ。俺たちが出会ってまだたった十年にも満たないけれど。

さて、どうするべきか。ティノアをこれ以上怒らせるのは絶対に避けたい。

こいつを怒らせたら都内の一角が水没しかねない。そして我が家の水道代が大変なことになりかねない。これだけは何としても避けたいところなのだが……。

しかしティノアの言うことを聞いて今からリベラリーゼに向かっ

てしまっては、また美刃に何をされるかわからない。
それに俺はただでさえ学園の成績が悪いのだ。この上学園を休み続ければ最悪退学ということもありうる。爺さんが骨を折って入学させてくれた学園だ。せめて二年は通いたいんだが……。
（私は大丈夫ですが）
（そりゃお前には関係ないだろさ）
テーゼの突然の言葉は意味が分からないものだった。
うん。どうしようか。どうすればいいのか全くわからない。
とりあえずこのままだとパンが食べられないので右手でナイフに固定された水に触れる。
右手首に巻かれた腕輪に意思を通す。ティノアと同じ孤独な蒼い輝きを頭の中で灯す。すると、樹の枝が幾重にも絡まり合って出来た腕輪から一瞬蒼い光が弾ける。
輝術の効果そのものを消し去るには、同じ輝色（レディアンス）の系統で、しかも同等以上の輝度（ルミナンス）で中和するしかない。
ナイフの表面にティノアのではない蒼い光がまとわりついて、固定効果を失ったナイフが液体に戻る。
そして俺が左手で首の下に持ってきていたコップの中に収まる。
そして俺はそれを一気に飲み干した。
うん旨い。さすがはクラリシア原産の、人体に収める為に作られた水だ。一口で全身に潤いが行き渡る。
「あ！　ずるい！」
「ずるいじゃない。危ないだろ。切られたら痛いじゃ済まないんだ」
「イツヤなら大丈夫でしょ。右手が無くなっても死ななかったし」
「そういう問題じゃない」
まぁ、手首が削られるのと、首元を切られるの。どっちの方が死ぬ確率が高いのかなど分かりもしないが。……いや首を切られたら出血多量、呼吸困難ですぐ死んでしまうよな。つまり俺はさっきまで何よりも死に近い立ち位置にいたのか。
全然気づかなかったよ。

「そんなことより……！」
身を乗り出してきたティノアは浮かび上がって俺の目の前まで来た。
互いの唇が触れ合いそうなほど話すのには適さない距離。
互いの瞳をのぞき込めるような距離。
椅子は付いたままというのが妙に気になる。
椅子の足が床と平行になっているのが視界の端に映る。
頼むから食器は引っくり返さないでくれよ、と場違いな事を言いそうになった、そんな時。
ティノアの瞳の輝きが一瞬逃げるように明滅したのを俺は見逃さなかった

彼女の隠せない輝きは

潤んだように見えるティノアの瞳を見て。
ティノアが考えていることが少しだけ分かった気がした。

「お前。誰かに何か頼まれたな？」

そんな俺の当てずっぽうでしかない問いは図星を突いたようで。巻き戻しでもしたかのように椅子の位置が床に戻り。ティノアの人形のように精緻な顔が少し人間味を帯びた。

「な、なんのことかしら～」

こ、こいつ本当に隠し事が下手だな……。

そっぽ向くな。そっちは冷蔵庫しかねえぞ。

サイバルさん。あんた、こいつなんかを信仰してて本当にいいのか？

丸分かりだ。もう改めて問いただす必要も無い。

「で？　誰に頼まれた？　あの冷血教区長か？　それとも派天（リディア）にでも頼まれたか？」

ティノアと直接話せる権限を持った人は多くない。

考えれば分かるはずだ。

ティノアの反応を見落とすな……！

「サイバルなんかの頼み事を私が聞くわけないでしょ！　それにはリディアわたしに頼み事なんてしないわ」

うん。この反応から見るにこの二人ではないらしい。

となると……あれ？　ティノアと話せるのは……誰かいたっけ？

おかしい。ティノアの反応から考えると誰かから頼まれて俺を連れていこうとしているのは間違いないだろう。しかし、ティノアに頼み事をできる人物……。

思いつかない！
だめだ。ブランクがあったとはいえ、ずっと一緒にいたティノアの単純な思考すら読めないなんて……！
頭を抱えて視界を閉じ、記憶を鮮明に思い出そうと目を瞑る。
数秒、だっただろうか。リベラリーゼで出会った人々の顔が浮かんでは消えを繰り返していたその時。
「イツヤの考えてることが少しだけわかるわ」
なに？　俺はティノアのことが全然わからないのにティノアは俺の考えていることが分かったのか！？
「少し、ううん。とても失礼なことを考えてる……！」
……すごく曖昧だけど間違ってはいないな。
嫌な色を感じて目を開ける。
ティノアの目に先程までの単純な脅しの色とは違う、殺気が込められていた。
このままでは危険だ！
家計が！　水道代が！
「て、ティノア。それは勘違いだ。俺は別にティノアは単調なバカだとか、無駄に年食ってる癖に見た目と同じで隠し事の出来ない子供みたいな性格だな、なんて微塵も考えてない！」
そうだ！
ティノアはもしかしたらサイバルさんに頼まれて俺を連れていこうとしたのかもしれない。それをいつの間にか身に付けた演技でそうと思わせない反応を見せたということも考えられる！
……いやいや。ティノアにそんなことができるわけない。
もう少しよく考えて発言しなければ……。
（もう遅いですけどね）
頭の中で色々と反省していると、蛇口を捻ってもいないのにキッチンの水道から水が勢いよく飛び出した。
その水は排水溝に流れることなく、蛇のようにくねくねと食卓の周りに伸びてくる。

弾けた水滴は浮かび上がって、ティノアの周りに集まり始めた。
一つ一つがくっついて大きな水球になっていく。
「……イツヤ。昨日の続きをしましょう。今度は手加減なしでね・・・・・・！」

この後に起こった出来事についてあまり多くは語りたくない。
ただ来客を知らせる救いの鐘の音が響くまで。家の中は水で造られた槍や刃物が入り乱れる殺人（未遂）屋敷になっていた。

水道代については調べたくなかった。

レンズの向こうの輝きは

「引きこもりの不良少年が水浸しになって現れた」
庭で出会うなり物語のモノローグのように呟いたのは船見司（ふなみつかさ）。メガネが似合う仏頂面の少女。学園のクラスメイトでもある。理知的と言えば聞こえはいいがこちらを見下すようなに見える瞳の輝きは俺の被害妄想が生み出した勘違い……だったらいいな。
「誰が引きこもりの不良少年だよ」
水浸しなのは否定できない。玄関に常備してあるタオルで軽く濡れてしまった服と髪を拭きながら、謂れのない中傷に不満を訴えてみた
道場で朝練するはずの時間は、家族との水遊びで消費してしまった。まぁ十分に運動は出来たのだけれど。
それよりも俺と船見の立ち位置は五メートル程離れている。話すには結構遠い微妙な距離だ。精神的にはこの距離の十倍ぐらい離れている気もする。
やっぱり俺って嫌われてるのかな。
「初等部の頃から失踪の常習犯挙句の果てに最長一年の行方不明記録を樹立。中等部の始業式から一週間行方不明。その後にひょっこり顔を出して真面目に通いだしたかと思ったら、すぐにまたに休んだり早退したりする始末。高等部になっても全然変わらない。そんな君のことを不良と言わず誰を不良と言えば良いのでしょうか？」
……そう言われると否定ができない。事実なだけに尚更。
両親が死んだ後の一年間と中等部の始業式前日から一週間。俺はリベラリーゼに入り浸っていた。途中で帰ることもできない事情があった。
（特に貴方が十三を迎えた時に起こった出来事は私にとっても衝撃でした。血で血を洗う過激な七日間でしたよね）
（捏造するな。俺にそんな過去はない）

（そうでしたか？）
あの一週間で俺が浴びたのは一人分の血と怨嗟だ。
（それは私の記憶にはないことですね）
（お前は寝てたからな）
（……中々面白いことがあったのですね）
あまり思い出したくないことを思い出してしまった。
テーゼと話して黙ったままの俺に船見が怪訝そうな顔を向けてきた。
何か話さなければ。
「それなら不良なだけで引きこもりではないだろう？　そこは撤回してもらおうか」
別にどう呼ばれても良かったのだが、何となく気になったので訂正を求めてみた。
「警察のご厄介になったという話も聞かなければ、どこかで見かけたという話しも聞きません。だったら家に引きこもっているという答えしか出てこないでしょう。……まぁ、運動はしているようなので健康的な引きこもりと言った所でしょうか？」
け、健康的な引き篭り？
俺が水浸しなのを、運動後でシャワーでも浴びていたのだと思っているのだろうか？
いや。いつもならそういう朝を迎えるのだが、今日はティノアと遊んでいたせいでそういうわけにはいかなかった。
「いや、別に引きこもっているわけじゃないんだが……それに何で今更改めてそんなことを言うんだ？」
「……私にも色々と理由があるのです。それに貴方のことは美瀬ちゃんにも頼まれていますから」
美瀬か……そう言えばあいつには昨日の復讐をしなければならないな。
今日の予定を考えるよりも先にしなければならないことがあった。
俺と知り合いというだけの関係性である船見には本当のことなど

を答えるわけにもいかず、口ごもってしまう。何も知らない普通の人間に、地球とは違う世界に行って色々なことをしています、などと言えば精神科を始め様々な病院を勧められるだろう。もし陽元の誰かにそんなことを言ったと伝われば俺の家の敷地に病院が建てられるかもしれない。

それくらいの常識は俺にもある。

（そんな常識は捨ててください）

ただ船見は只の人間ではない。彼女はとある危険な組織から派遣された魔術師さんだったりする。中等部の二年の時にはちょっとした波紋を学園中に巻き起こしたものだ。

だから俺のしていることを話したら信じてくれるかもしれないが、今は話す気にならなかった。

（貴方が他人を気にするなんて面白い冗談ですね）

何で笑うんだよ。

「では、いつもどこで何をして過ごしているのですか？　色々と報告をしなければならないので、正直に答えてもらいたいのですが？」

「……報告？」

「冗談です。忘れてください。で、昨日の夜は何をして過ごしていたのですか？」

……まぁいい。取り敢えず何か言い訳をしないと。船見をここに遣った奴のことを考えると適当なことを言うわけにもいかない。

うまく言い訳をしなければメイドさんと執事さんに拘束され、十時間にも渡る勉強会と言う名の説教を喰らう羽目になる。

身体の震えが止まらない。

「えっと、別に何も」

しかし上手い言い訳など何も思いつかなかった。

我ながら残念な脳みそだ。

「何も、ですか」

「ああ、何も」

……。

気まずい。数秒の沈黙が、気まずい。
（二回も言わなくてもいいですよ）
それほどに気まずい空気になった、ってことだよ。
「そうですか。それでは」
船見は振り返るとそのまま歩いていった。
学園に向かうのだろう。
「って、え？　それでいいのか！？」
「なんですか？　言い訳があるのなら早くしたほうがいいですよ。私は凍津弥君が言ったことをそのまま美刃（びじん）姉さまに伝えますから」
船見は美刃（みは）のことを美刃（びじん）と呼ぶ。愛称みたいなもので気にすることはないのだが、何故姉さまと呼ぶのかは知らない。兄弟でもないのに。
まぁ、そんなことはどうでもいい。
美刃にそんなことを報告されては昨日の二の舞になってしまう。
それだけは避けなければ。
「ごめんちょっと待ってくれ。いや待ってください」
（情けない。実に情けない）
（二回も言うなよ）
（それほどまでに今の貴方は情けない姿だった、ということです）

テーゼの俺に対する否定できない、云われある悪口を合図にしたように。
すたすたと歩いていく船見の歩みが若干遅くなった。恐らくは待ってくれているのだろう。
止まらないのが船見らしい。
俺は中身の入っていない鞄を手に取り、船見の後を追う。

施錠をしていないドアの隙間から突き刺さってくる、氷柱のように冷たくて鋭い視線を感じながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4236y/

君の世界の輝きは

2011年11月20日18時49分発行